

日本アーレント研究会・三浦 隆宏・木村 史人・渡名喜 庸哲・百木 漢編

アーレント読本

本書は、第一部「アーレントにおける基本概念」と第二部の論稿とを結び、第二部「現代世界におけるアーレント」に「活動／行為」（橋爪大各一五編の論稿、第三部「輝」は行為と語りの概念は日独仏と英語圏の「各国における受容」、第四部「そのあいだに関連する」の理解を準備し、人物や特定の主題にふれ「二編のコラムから成り、中堅・若手を主に五〇名の研究者が稿を寄せている。アーレントの専門家ではない私が書評をするのもなかばそのためだ。適任者のほとんどが執筆陣に名を連ねているからである。

字術読物

が、第一部と第二部とはそうきれいに棲み分けしているわけではない。たとえば、第二部の「自由論」（齋藤純一）は自由概念を整理し、後続の政治学や法学からみた諸論稿——「共和主義」（森分大輔）、「法と権利」（毛利透）、「政治学」（部延剛）、「市民的不服従」（間庭大祐）——の導入部として第一部の論稿と同様の役割も果たしている。「社会的なもの／社会」（河合恭平）も社会概念を経済的側面と社会的側面とに整理し、アーレントの社会概念の特異性を指摘して、第二部と第一部双方の役割を果たしている。

「第一内部での解釈の論争に立ち向かい、第二部で展開される個別の論点にすでに踏み込まざるをえないからだ。そこで第一部の諸論稿ですでに挑発的な問いが立てられる。アーレントの古代への肩入れでは「本来は歴史的なモデルが、アナクロニスティックに『規範化』されてはいないのだろう」（「公と私」（川崎修）。「アーレントが生

きている（「全体主義」集）（意志）（木村史人）が試みられ、宮崎論稿では、死が彼女から執筆する機会を奪った「精神の生活」第三部のありうべき内容が展望される。ちなみに、私のアーレント評価は両義的だ。真に現象学的な洞察や弁証法的にタフな推論に感嘆しつつも、「レヴィナスやヨナスならもう少し生の必需、ゾエー、弱者に同情ある描き方を

するだろう。なぜ、この高所から語るのか。高所に立てるか。しばしばそう思う。本書でこの問いが霧消したわけではない。だが本書は、アーレント外部からのこうした問いをアーレントの多様な文脈の内部でアーレントに問いを突きつけて、アーレントとともに考えるように導いている。たとえば、渡名喜論稿（活動と思考、つまり「活動的生」と「精神の生活」とを架け渡す出色の論稿である）は、アーレントの責任論が「全体主義社会への加担を拒否しなかった」で

た一般の人びとも妥当しうるきわめて強い自己責任論になりうる」点を、毛利論稿は評議会への彼女の評価のなかに「市民を信頼しすぎている」点を指摘する。間庭論稿では、政治／活動の極北に位置するというべき「潜在的な同意」の意義と可能性の考察へと導かれる。

本書を日本アーレント研究会という専門家集団による権威ある教本とみなすとすれば皮相な受け取り方だろう。それを望む読者には、たしかに読解の導きとなる整合的な解釈が提供されている。しかしそれ以上に、執筆者の多くは多義性と多様な解釈と格闘した論稿をとおして、一致による正解よりも意見の多様性を重んじたアーレントのそのの精神を讀者に伝えていく一冊である。（しながわ・てつひこ 関西大学 教授・哲学・倫理学）

★みくら・たかひろ 榎山女子大学准教授・倫理学。著書に『活動の奇跡 アーレント政治理論と哲学カフェ』。一九七五年生。
★きむら・ふみと 立正大学准教授・哲学。著書に『存在の問い』の行方。一九七九年生。
★となき・よつこ 立教大学准教授・現代哲学・社会思想。共訳書に『レヴィナス著作集』（全三巻）など。一九八〇年生。
★ももき・ばく 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員・思想史。著書に『アーレントのマルクス 労働と全体主義』。一九八二年生。

アーレントとともに考えるように導く

多義的な文脈、多様な解釈と格闘した論稿

品川 哲彦



A5判・430頁・3200円
法政大学出版局
978-4-588-15109-5
TEL. 03-5214-5540

私を批判しているのではない。むしろ本書の優れた点と考える。というのも、基本概念を押さえる第一部にして、アーレントの概念と文脈の多義性からアー

きていたときには気づかれないことなかった「制作／仕事」（篠原雅武）環境危機をどう考

えるべきか。「全体主義の構造とダイナミズム

おいて、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

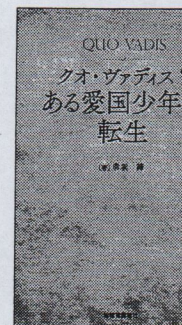
集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐

集」の一面性が印象づけられる。さらに、アーレントの多義的な文脈の理解をとおして、彼女が明確には展開しなかった議論を推察する「手がかりの蒐



四六判・434頁・40
柘植書房新社
978-4-8068-074
TEL. 03-3818-92



学校と働き方
労働と学校
学校と働き方

近刊セレクト
文化読物
◇問陽子「海をあげ」(四六・一六〇〇円)
◇筑摩書房・10月20日刊
◇ベストセラー「探検で逃げる」から三年、身体に残った言葉を聞きとるようにして書かれた初めて